

平成22年 5月17日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720137
 研究課題名（和文） Can-Doリストを超えるアチーブブル・ベンチマークの
 設計と開発およびWeb公開
 研究課題名（英文） Development of Achievable Benchmark

研究代表者

前田 啓朗 (MAEDA HIROAKI)
 広島大学・外国語教育研究センター・准教授
 研究者番号：10335698

研究成果の概要（和文）：英語運用能力の指標として英語学習・指導に資するべく、このデータベースを開発した。標準テストのスコアは簡便な指標ではあるが、そのスコアを所持することと、何がどの程度できるのかということについてはわかりづらい。また、Can-Do ステートメントについては、あくまで学習者の自己申告に基づく評定であることが多く、また、実際のパフォーマンスに基づかない。そこで、従来の問題点を克服する、当ベンチマークを開発した。

研究成果の概要（英文）：This benchmark development is aimed to provide the index of English language proficiency, which can be used as the reference for English learning and teaching. Both standardized test scores and can-do statements are not directly connected with authentic performance by learners, however, this study has collected learners' language use so that such problems can be partially overcome.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	0	1,500,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	540,000	3,840,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育，習熟度

1. 研究開始当初の背景

(1)

国内の初等・中等教育において、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）が導入されて以降、評価についての関心は高まってきていた。国内では、初等・中等教育での「絶対評価」で意図された目標に準拠した評価という意味通りではないが、尺度が安定している

という意味での絶対評価として、TOEIC テスト等の標準テストを用いた評価が、広く関心をひいていた。

(2)

その後、スコアの持つ意味に関して、いわゆる Can-Do リストが相次いで公表されてきていた。また、特定の企業や学校における言

語使用ニーズに応じた Can-Do リストも作成されていた。これらの多くは、ヨーロッパ圏内で共通的に用いられる尺度の、CEFR を援用している。

(3)

確かに、さまざまな言語運用の場面を記述して「…ができる」という Can-Do ステートメントを集めたリストには、言語運用場面を学習者に現実的にイメージさせることができるという面で教育的意義は認められる。しかし一方では、根本的な欠陥が否めない。それは、場面や機能だけを定義しても、そこでどのような英語が使われているかは限定できないということである。たとえば、「テレビのニュースで天気予報を聞きとることができる」というステートメントは、どのような速さで話されているのか、視覚情報はどの程度提供されているのか、予報されている天気はどの程度複雑なのか等、現実的にはそれら次第で Can-Do か Can “NOT” -Do かは変わってくるのである。

2. 研究の目的

(1)

そこで、Can-Do リストの教育的意義である、学習者・教師に対してどのようなことがどの程度できるようになればよいのかを具体化するという点を生かしつつ、Can-Do リストを超えるものへの架け橋として本研究課題を位置づけた。

具体的には、どのような英語学習者が、どのような英語を、どのような使い方で運用しているのかということについて、個々の学習者の適性（学習者要因）と言語運用をデータベース化し、様々なレベルの学習者に対する到達可能な目標基準を示すことである。

(2)

この目標基準は学習者にとって漠然と「…ができる」とどまるものではなく、実際にどのような学習者がどのくらいの言語運用をしているのかを実例としてタスク情報とともに示すものであり、学習者にとってアチーブブル（到達可能な）・ベンチマークとして機能させることを意図した。

(3) また、このベンチマークは、学習者の参照用となるのみではなく、学術面では中間言語研究や第二言語習得研究における貴重な基礎資料として、教育研究面では教材開発やカリキュラム・デザイン、あるいは学力評価の有益な基礎資料として利用できるものであると考えられた。

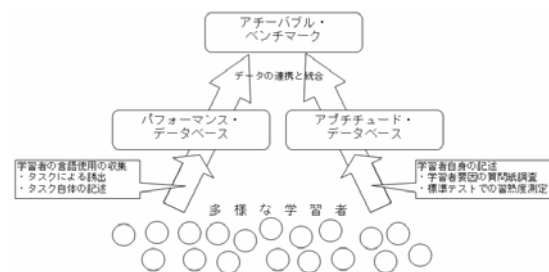
3. 研究の方法

(1)

英語運用能力の指標として TOEIC スコアおよび TOEIC Bridge スコアを用いた。広く利用できるテストのスコアを用いることによって、一般的な比較や追調査を行いやすくするとともに、到達可能なベンチマークとしての性格を特徴づけた。

また、学習者要因の指標としては、学習観・動機づけ・学習方略に関する尺度を開発済みであった。これらの尺度については構成概念妥当性が十分であること、多様な習熟度の学習者に対しても測定が安定していること、そして習熟度や言語運用との関連が深いことが明らかとなっていたため、これを用いることとした。

そして、具体的なパフォーマンスの誘出にあわせて、英語運用能力と学習者要因を測定し、言語運用の事例を収集した。



(2)

①聞くことのパフォーマンスについては、聞いて理解することに焦点を当て、一般的に用いられることが多いリスニングタスクを用いることとした。

- ・写真や絵を見て、それに合う複数の説明を聞き、最も適切なものを選ぶ

(視覚情報の例は下図)

1 答:(A) (B) (C) (D)



- ・問かけを聞いて、それに対する複数の応答を聞き、最も適切なものを選ぶ

(すべて音声で提示)

- ・対話文やアナウンスを聞いて、その内容に関する問いとその答えの選択肢を読んで、最も適切なものを選ぶ

(視覚情報の例は下図)

7 答:(A) (B) (C) (D)

Where is this conversation taking place?

- (A) At a pharmacy.
- (B) At a law firm.
- (C) At a hospital.
- (D) At a dentist's office.

②話すことのパフォーマンスについては、自由なパフォーマンスや半構造化した誘出法であると、話題への親密さなど、口頭での英語運用能力という概念が非常に広がる。したがって、実際の会話場面においての発話をどの程度自然に行うことができるかという観点から、対話文の音読を録音することとした。

対話文を紙媒体（下図参照）と音声媒体で用意し、紙媒体の対話文を用いて、不明な点がないように指導を行った。そして、音声媒体においては2人の話者のうち1人の音声を無音化しておき、残る1人の音声を再生しつつ、無音化された話者の部分について音読を求めた。

Mel : I want to buy a new guitar.
 Fran : That's nice. You've always liked playing music.
 Mel : But a good guitar is really expensive. I may have to pay a thousand dollars.
 Fran : That's a lot of money.
 Mel : Yeah, so I have to save my money.
 Fran : I guess you need to cut back on how much money you spend.
 Mel : I'm already doing that. But it's not enough. I need to be making more money, too.
 Fran : You're doing tutoring now, right?
 Mel : But I don't have enough students. I've got to find some new ones.
 Fran : You should put up an ad at the student center.
 Mel : I know I should. But I haven't gotten around to it yet.
 Fran : Well, you should get working on it.
 Mel : You're right. I'll do it next Friday. I have some time then.
 Fran : Don't forget.
 Mel : Don't worry. I won't.

③読むことのパフォーマンスについては、多様な誘出法が考えられるものの、内容スキーマ（話題への親密さなど）および形式スキーマ（論説や物語などの文体への親密さなど）に関する要素に左右されない測定を志向し、検討を行った。

その結果、標準テストで多く用いられる、文章に空所を設け、前後の文脈から推測できる範囲で、その空所に補充するものを選択肢の中から選ぶ形式とした（下図参照）。

The writing and teaching of history is rarely neutral and (11). What is taught (12) the country you are in, the school you go to, the textbooks selected for you, and the teachers who teach you. (13) historian has a (14). The famous historian E.H. Carr long ago advised students of history to "know the historian". An African proverb says, "The history of the lion is written by the hunter."

11	(A) distinctive	(B) objective	(C) retrospective	(D) subjective
12	(A) depends of	(B) depends on	(C) up on	(D) up to
13	(A) All	(B) Every	(C) Other	(D) Whole
14	(A) ache	(B) bias	(C) bind	(D) clue

また、伝統的な言語能力観においては文法的な知識も読む納涼区に含まれることが少なくないことや、文字媒体で提示されるために読む能力の測定と親和性が高いことを考慮し、空所補充形式の文法問題も用いることとした（下図参照）。

27. (172) 答: (A) (B) (C) (D)
 He would ___ friend to betray my trust.
 彼は私の信頼を決して裏切らない友人だろう。
 (A) not always be a
 (B) never fail to be a
 (C) not be a
 (D) be the last

④書くことのパフォーマンスについては、場面・状況・目的を設定して、30分間で300語程度のエッセイを書くというタスクを用いることとした。

4. 研究成果

得られたデータを電子化し、整理することで、本研究課題の目的である、どのような学習者が（学習者要因や習熟度）、どのような状況において（タスクの記述）、どのような言語運用をしたのか（パフォーマンスの記録）を蓄積することができた。

その結果、しばしば指摘されるように、一般的な英語習熟度の指標である標準テストのスコアからは、特定の状況における言語運用を必ずしも予測・説明できるものではないことが再度確認された。一方、その予測や説明は、緩やかには妥当であることも確認できた。このことは、本研究の新奇性である、実際のパフォーマンスを蓄積することによって、到達可能なベンチマークを提示することによる利点であると言えよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計1件）

①前田啓朗, 2009, 「大人数の工学研究科大学院生を対象にしたWBT利用の英語指導：一斉指導・個別学習・研究室単位での指導の連携」, 『全国英語教育学会第35回鳥取研究大会』, 2009. 8. 8. 鳥取大学

〔その他〕

本研究課題の途中成果を含む招待講演

①前田啓朗, 2010, 「広島大学におけるTOEICテスト活用：到達目標に準拠した評価への実践」, 『TOEIC研究会「大学英語教育とTOEICテスト—どう使うかどう活かすか—」』, 2010. 3. 21.

②前田啓朗, 2010, 「広島大学の英語教育における到達目標の設定・指導・成績評価」, 『2009年度金沢大学外国語教育研究センター研究開発シンポジウム』, 2010. 3. 9.

③前田啓朗, 2009, 「外国語教育特定プログラムにおける目標設定・指導・評価」, 『文部科学省事業平成21年度「大学教育充実のための戦略的・大学連携支援プログラム」「医療・情報・工学連携による学部・大学院連結型情報医工学プログラム構築と人材育成」第1回情報医工学プログラムFD・SD研修会』, 2009. 9. 18.

④前田啓朗, 2009, 「効率的な英語の練習方法と自然な英語の使用法：日常的な文脈から学術的な文脈まで」, 『化学工学会第41回秋季大会』, 2009. 9. 16.

- ⑤前田啓朗, 2008, 「大学英語教育への提言 : 広島大学における英語教育改革の取り組みから」, 『静岡大学FDシンポジウム』, 2008. 12. 19.
- ⑥前田啓朗, 2008, 「広島大学における英語教育改革の経緯 : 到達目標型教育の理念の実現に向けて」, 『福山大学英語教育に関する懇談会』, 2008. 11. 13.
- ⑦前田啓朗, 2008, 「大学英語教育における成績評価と外部試験 : 広島大学における評価の現状と課題」, 『第 24 回大学英語教育学会中国・四国支部大会シンポジウム』, 2008. 7. 6.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 啓朗 (MAEDA HIROAKI)

広島大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号 : 1 0 3 3 5 6 9 8

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :